

感染症発生動向調査委員会報告 10月

今月のトピックス

インフルエンザ、過去6年間に比べて最も早く増加の兆し、Aソ連型を検出。

ノロウイルスを含む感染性胃腸炎、例年より少し多く、集団発生もあり、流行期に向けて注意。

百日咳では、依然として20歳以上の報告が半数を占める。

【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点：84か所、内科定点：55か所、眼科定点：15か所、性感染症定点：26か所、基幹（病院）定点：3か所の計183か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症とを報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計139定点から報告されます。

平成19年9月17日から平成19年10月21日まで（平成19年第38週から第42週まで。ただし、性感染症については平成19年9月分）の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

全数報告疾患

< レジオネラ症 >

10月は1例の報告でしたが、4月以降毎月報告があり、今年度は現時点での合計が23例と、すでに昨年の3倍以上になっています。全国でも、第42週までの累計は516例と、昨年の報告数をこえています。（表参照）

レジオネラ症については、平成15年4月より、尿中レジオネラ抗原検査が保険適用になり、診断が迅速に出来るようになりました。しかし、レジオネラ肺炎は、早期に適切な治療（マクロライド系、ニューキノロン系、リファンピシンの投与等）を行わないと、症状が急激に悪化したり、致死的になる場合があります。高齢者や、糖尿病などの基礎疾患がある人は注意が必要です。また、肺炎患者においては、循環式浴槽やジャグジーなどの入浴施設の利用を確認する事も必要と思われます。

平成19年 週 - 月日対照表

| | |
|------|-----------|
| 第38週 | 9月17～23日 |
| 第39週 | 9月24～30日 |
| 第40週 | 10月 1～ 7日 |
| 第41週 | 10月 8～14日 |
| 第42週 | 10月15～21日 |

レジオネラ症の報告数の年別推移（2000年～2007年第42週）

| | 2000年 | 2001年 | 2002年 | 2003年 | 2004年 | 2005年 | 2006年 | 2007年 |
|---------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 全国 | 154 | 86 | 167 | 146 | 161 | 281 | 514 | 516 |
| 神奈川県 | 2 | 2 | 4 | 6 | 6 | 19 | 26 | 36 |
| 横浜市（再掲） | - | - | 3 | 2 | 1 | 8 | 7 | 23 |

< 破傷風 >

三種混合を未接種の小児の報告がありました。横浜市での破傷風の報告は、2005年までは1例、2006年が2例です。2007年は、5月に1例、45歳の男性の報告がありました。全国での、2007年第42週までの累計は、77人で、そのうち60人が60歳以上で、19歳以下の報告は、横浜市のケース以外にはありません。

その他の疾患については、横浜市感染症発生動向調査全数情報をご覧ください。

http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/report.html#zensu

定点報告疾患

< インフルエンザ >

今年、例年よりかなり早く集団かぜによる学級閉鎖等が報告されています。神奈川県では、昨シーズンより3か月早く、相模原市で今シーズン初めての報告がありました。

(http://www.eiken.pref.kanagawa.jp/003_center/0304_influenza/files/071016_kisyahappyou.pdf)

横浜市では、第28週以後定点からの報告はありませんでしたが、40週、41週に1人ずつ、第42週には、21人の報告がありました。過去6年間と比べて、最も早く増加の兆しが見られています。

また、横浜市内の病原体定点の検体からは、昨シーズンは流行が見られなかったAソ連型が検出されており、今後の動向に、よく注意していく必要があります。

< RSウイルス感染症 >

例年、インフルエンザに先がけて流行が見られます。昨シーズンは、過去3年間に比べてかなり多く報告されました。今年、第37週以後報告が続き、第41週に5人、42週に3人と、少し目立ってきました。全国での報告数も、昨年より多い数で、増加傾向にあり、動向に注意が必要です。

平成19年 週 - 月日対照表

| | |
|------|-----------|
| 第38週 | 9月17～23日 |
| 第39週 | 9月24～30日 |
| 第40週 | 10月 1～ 7日 |
| 第41週 | 10月 8～14日 |
| 第42週 | 10月15～21日 |

< A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 >

例年、春季を中心とした流行の後に夏季には大きく低下し、また冬季の流行に向かって増加します。今年も、第34週に最低値となった後、増加傾向が続いており、第42週は定点あたり0.66でした。川崎市が1.0、神奈川県(横浜、川崎を除く)が0.95と、どちらも横浜より高くなっており、今後の動向に注意が必要と思われるます。

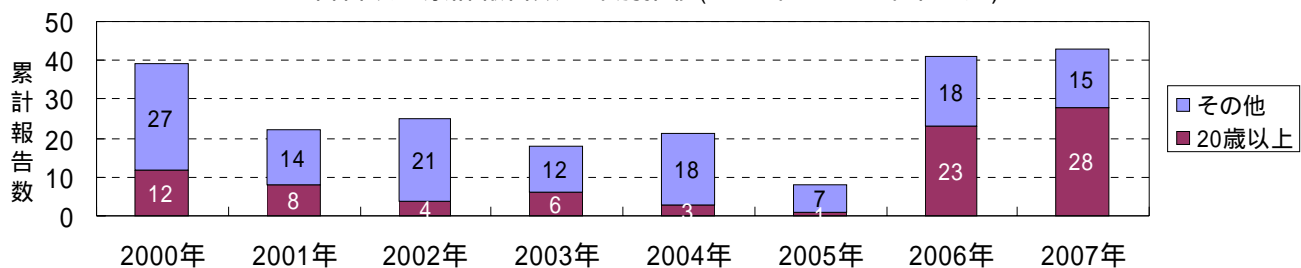
< 感染性胃腸炎 >

昨年は、10月末頃から増加し、12月に1999年以降最大の流行がありました。全国では、過去5年間の同時期と比べるとやや多く、第41週で定点あたり3.07でした。横浜市も過去5年間と比べて多く、第42週は3.18、また川崎市は5.41とかなり高く、これから冬の流行期に向けて、注意が必要です。

< 百日咳 >

今年、第42週までで43人の報告があり、20歳以上が多くなっています。第38週～42週での報告を見ると、9人のうち4人が20歳以上、あとは3歳が1人、1歳が2人、11ヶ月以下が2人でした。成人は、症状が典型的ではないために診断が見逃されやすく、感染源となって周囲へ感染を拡大してしまうこともあります。百日咳は、母体からの移行抗体が有効に働かないために、乳児早期から罹患する可能性があり、ことに生後6か月以下では重症化する危険性があるため、早めに予防接種を受けることをお勧めします。(三種混合ワクチンとして、生後3か月から接種できます。)

百日咳の累計報告数の年別推移(2000年～2007年第42週)



< 麻しん >

全国の小児科定点からの麻しんの患者報告数は、第39週が47人、40週が36人、41週が20人と、減少してきています。横浜市では、39週に3人、40週に2人、41週に3人の計8人の報告があり、うち、9か月の1人を除きすべて10代で、8人とも予防接種歴がありませんでした。

麻しんについては、油断することなく、次の流行時に適切な対応がとれるように準備しておく事が大切です。

(http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2007nen/measles-sokuhou.pdf)

麻しんの予防接種については、単独ワクチンの1回接種から、2006年度より、麻しん風しん混合ワクチンによる2回接種に変わっています。また、麻しんの排除に向けて、来年4月より5年間、中1及び高3相当の年齢への定期接種が実施される(厚生労働省でパブリックコメント募集中; 下記参照) 予定です。

(<http://search.e-gov.go.jp/servlet/Public?CLASSNAME=Pcm1010&BID=495070152&OBJCD=100495&GROUP>)

< 性感染症 >

性感染症は、診療科でみると産婦人科系(産婦)の11定点、および泌尿器科・皮膚科系(泌・皮)の15定点からの報告に基づいて集計されています。

9月は、尖圭コンジローマ以外の3つの感染症で、8月より増加しています。特に、性器クラミジア感染症の男性では、昨年よりも多く、15～19歳が2人報告されていました。

【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点:8か所、インフルエンザ(内科)定点:5か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所、の計17か所を設定しています。検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

衛生研究所から

< ウイルス検査 >

2007年10月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点27件(咽頭ぬぐい液)、眼科定点1件(結膜ぬぐい液)、基幹定点3件(咽頭ぬぐい液3件、髄液1件、血清1件)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は気道炎20人、インフルエンザ2人、発熱のみ2人、ヘルパンギーナ1人、胃腸炎1人、発疹1人、眼科定点は流行性角結膜炎1人、基幹定点はインフルエンザ1人、血球貪食症候群の疑い1人、ウイルス性脳症の疑い1人でした。

11月9日現在、小児科定点のインフルエンザ患者2人からインフルエンザウイルスAH1型、気道炎患者1人からコクサッキーウイルスB5型、別の気道炎患者1人からヘルペスウイルス1型、発熱のみ患者1人からポリオウイルス2型、発疹患者1人からポリオウイルス3型が分離されています。

これ以外に、PCR検査では、小児科定点の気道炎患者6人からRSウイルス、別の気道炎患者1人からコクサッキーウイルスA10型、発熱のみ患者1人からコクサッキーウイルスA2型、胃腸炎患者1人からエコーウイルス25型の遺伝子が検出されています。また、インフルエンザウイルスAH1型が分離された患者1人からは、RSウイルスも遺伝子が検出されています。

基幹定点は、インフルエンザ患者1人からインフルエンザウイルスAH1型、血球貪食症候群の疑い患者1人からパレコウイルスがPCRで遺伝子が検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

< 細菌検査 >

10月の感染性胃腸炎関係の受付は8菌株で腸管病原性大腸菌と毒素原性大腸菌が各1件検出されました。溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体の受付は1件で検出されませんでした。